

## アメリカ科の二年間が銀行業務のバックボーン

第3期（1955年卒業） 吉岐 誉夫

教養学科アメリカ科を卒業したのは1955年、今から丁度60年前のことである。

第一に想起するのは恩師中屋健弑先生を措いてほかにはない。先生の最初の授業は、冒頭「私の教えるアメリカ史はアメリカの学生が学ぶ母国史よりレベルの高いものであるからその覚悟で学べ」という一言から始まった。

その言葉通り週二回の授業と、毎度学生夫々に貸与される原書文献（すべて先生の蔵書）を読んでのレポート提出、採点のうえ返却、で半年間大いに鍛えられた。時には厳しく、そして破顔一笑のお顔が昨日のように目に浮かぶ。

第二には、シカゴ大学留学帰りの気鋭の経済学者内田忠夫講師を囲んでのサミュエルソン「Economics」の購読演習である。丸善で購入した分厚い原書にわくわくしながら取りついた気持ちを思い出す。程なくしてサミュエルソン経済学は経済学学習の定番となったが、当時はその数学的手法を駆使した最新鋭の理論構成に刮目したものである。ご自宅にまで押しかけて教えを乞うたこともあった。その後内田先生は、計量経済学の泰斗として日本政府の経済政策をリードされた。

第三に、斉藤真先生、斉藤光先生、嘉治真三先生、小原敬士先生（一橋大学）、当時助手であった嘉治元郎先生、のお顔もたちどころに思い出す。各先生共マンツーマンに近い形での授業であったため、夫々のお人柄に触れることの多い日常であった。

就職が内定してから館龍一郎先生の「金融論」を本郷の経済学部で聴講に行ったが、文字通り大教室での講義でノートを取ることがすべてであり、小人数のアメリカ科の授業の有難さを心底から痛感したものだ。

卒業後は二期の小松健男さんに続き住友銀行に就職した。朝鮮戦争特需の反動不況（1954年）の翌年であったが、景気は急速に回復し、爾来1973年の第一次オイルショックに至る間、数回のリセッションをはさみながら、神武景気、岩戸景気、オリンピック景気、そしていざなぎ景気、と続く実質経済成長率が平均10パーセントを超える所謂高度成長期が続く。

今思うと、丁度この期間が私の銀行での修行時代と重なる。新宿支店、大阪船場支店、本店審査部、東京支店、と第一線勤務が多く、現場でいくら預金を集めても企業の成長資金需要に追い付かない、という慢性的資金不足に悩まされる日々であった。

第一次オイルショックにより日本経済は戦後初のマイナス成長を経験する訳だが、当然のこ

とながら取引先企業に対する影響は甚大で、銀行経営もより複雑で多難な時代に入って行く。

今や銀行を卒業して四半世紀、ビジネスの現場を去って十余年になる現在、わが修行時代を振り返ると、アメリカ科で学んだ知識が何かしら蓄積され能力の一部として発揮されたことは当たり前として、何よりも、密度の濃い二年間が業務遂行のバックボーンとして重要な資質を与えて呉れたように思う。

いささか抽象的ではあるが、

- (1) 漫然たるもの、或いは旧態依然たるものへの抵抗（教養学科を選んだ最大の理由でもある）
- (2) 新しいもの、未知なるものの探求（学ばされた、という意識を持たない）
- (3) 結果としての潜在能力の開発（やれば出来るという自信）

等が挙げられよう。

卒業して 60 年の現在も、当時一緒に学んだ三期生の仲間（現在 4 人）が、半年に一回昼食を共にして情報交換やら四方山話を語らっているが、夫々異なる分野に進んだにも拘らず、会えば幾星霜の歳月を忽ち超越し、なお前向きで、楽しい、そして老化防止に有効な時間を共有出来る、これもアメリカ科に学んだ有難い余禄である。